

書評

目黒泰一郎 編

左アプローチによる TRI

倉敷中央病院副院長・循環器内科

光 藤 和 明

右上肢からCAG(Coronary Angiography；冠動脈血管造影)あるいはPCI(Percutaneous Coronary Intervention；経皮的冠動脈形成術)を行ったことのある術者は、右上肢からの冠動脈造影ではカテーテルのエンゲージの困難な例を少なからず経験しているはずである。腕頭動脈が蛇行しカテーテルが上行大動脈に折り返すように進んでいくときなどはその極みである。それらは左上肢からのアプローチが解決してくれることも、また多くの術者が感じていると思われる。なぜなら、大腿からのアプローチと左上肢からのアプローチは、大動脈弓を越えた後の走行が類似しているからである。さらに橈骨動脈アプローチでは、上腕動脈アプローチに比較して穿刺点は術者からそれほど遠いわけではなく、比較的左大腿動脈アプローチに近くすることが可能である。にもかかわらず、多くの術者は右橈骨動脈アプローチを好んで用いている。理由はいくつかあるであろう。①慣れていないのでコツがあるとしてもそれがわか

らない、②不測の不都合が起こり得ることが心配である、③いくつかの予測し得るデメリットが考えられる、④現状で満足して“食わず嫌い”になっている——などである。

PCIの術者は、他者が行っている方法を取り入れるべきかどうかを考慮するとき、しばしば自らが長年行ってきた方法を擁護するような論理を展開して、新しい方法を排除しようとする。時としてその手技の理念にかかわることなので、新しい方法がそれまでの自分の行ってきた方法の価値をおとしめることになってしまうのが大きな理由であるように思われる。しかし、実際に新しい方法を取り入れてみると、そのメリットが初めて理解できるし、新たな展開の手段にも考え至ることが多いのである。また、取り入れてみないとそのよさが永遠に理解できない部分がある。

本書は、左橈骨動脈アプローチのメリットとデメリットとを論理的に明らかにして、メリットを活かす方法とデメリットをキャンセ

ルする方法とを具体的に示している。そしてそれらは独自の工夫に満ちたものである。著者らの施設における左橈骨動脈アプローチのシステムは一朝一夕ででき上がったものではなく、現在の完成された形に成長するために多くの努力が傾注されたものである。論理的背景と手技の実際の記述はその手技を知らない術者にもそのメリットがきわめてよく理解でき、左橈骨動脈アプローチを取り入れることを躊躇させないであろう。

また本書は、左橈骨動脈アプローチをすでに行っている術者にとってもその質を高めるための具体的な方法が数多く記述されているし、橈骨動脈アプローチ一般に関して有益な情報も併せて記載されている。さらに本書は、実際に日々左橈骨動脈アプローチを数多く行っている比較的若い術者が執筆しており、現場からの生の情報という新鮮さがあると同時に、マスターといわれる目黒泰一郎先生のような人でなくても質の高いTRI(Trans-Radial Coronary Intervention；経橈骨動脈冠動脈形成術)ができるという勇気を与えてくれるものである。多くのカテ室で座右の書物となる価値がある。

〔B5 頁120 2006年 定価
5,250円(本体5,000円+税5%) 医学書院刊〕

* * *